



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行/カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)
日曜日 7:00am (修道院のミサ)、9:30am



つれづれの友となりても

主任司祭 小西 広志 神父

つれづれの 友となりても慰めよ 行くことかたき われにかはりて

貞明皇太后 (九条節子) は大正天皇の皇后でしたが、生涯にわたってたくさんの和歌を詠まれ、漢詩も多く残しています。

この歌は昭和7年11月10日、大宮御所での御歌会で詠まれたものです。詞書きには「癩患者をなぐさめて」とあります。この歌の歌碑が全国のハンセン病療養所に建立されました。

大意は「そのままずっと病人の友となって慰めてあげてください。お見舞いに行くこともできないこのわたしに代わって」となります。多くのハンセン病の患者さんたちはこの歌に慰められたそうです。しかし、この歌は患者さんたちに向けてではなく、隔離政策を推奨した光田健輔氏に向けてのものだったと言われていました。この歌のおかげでハンセン病患者さんたちの隔離政策を後押ししたのは皇室であったと主張する人びともいます。そのような背景はともかくとして、この歌はここに浸みるものがあります。

今年の元旦に生じた「令和6年能登半島地震」は、厳しい現実を教えてくださいました。わたしたちが住んでいるこの国は大規模災害に決して強くないのです。今もなお、能登半島の多くに避難所が開設され、水道が寸断されています。たくさんの人びとが困難な生活を強いられています。しかも、交通の関係上、これまでの大規模災害と比べて、簡単には支援に出かけられません。結局のところ、わたしたちは被災者の方々に何もなすすべがありません。十数年前の「東日本大震災」では無数のボランティアが復興のために集まりました。しかし、今回は難しいです。それほどわたしたちの社会は力を失っているのです。

2月の始めに、修道院から元田神父と豊田修道士を被災地に派遣しました。車2台で出発して行きました。その時、わたしのところに浮かんだのはあの貞明皇太后の歌でした。「つれづれの 友となりても慰めよ 行くことかたき われにかはりて」。

その後、元田神父は現地に滞在し、フランシスコ会の若手の修道士たちが交代でボランティアをしています。現地の様子ですが、あまり復興は進んでいません。瓦礫の撤去作業を中心にしながら、七尾市の高齢の方々の家を巡って飲料水を届ける仕事、そして七尾教会で日曜日の昼に開催される「じんのび食堂」(「じんのび」とは土地の言葉でノンビリの意味だそうです)のお手伝いをしているそうです。

カリタスジャパンと名古屋教区は金沢教会に「のサポートセンター」を開設しました。そして、能登半島西側の羽咋教会と東側の七尾教会にボランティアベースを設立しました。現時点では北側の輪島教会には道路の状況が悪いために出かけることは困難です。将来的には輪島教会周辺にもボランティアベースを設ける予定です。

被災地と関わる責任者である片岡神父(名古屋教区)によれば、人びとの生活が安定するには六年ぐらいの年月が必要ではないかとのことでした。カトリック教会は阪神淡路大震災(1995年)の時には最後まで被災した方々に寄り添いました。東日本大震災(2011年)では、今もなお復興のためのお手伝いをカリタスジャパンを中心に行っています。今回も同様に最後まで細やかなお手伝いをしていくつもりです。

主の教会は「ともに歩む」教会です。道のりは険しくとも、多くの人びとと手を取りあって歩むのです。わたしたちが被災地に赴くことは無理でしょう。しかし、祈りを通じて、困難に直面している人びとと手を取りあうことは可能だと思います。

瀬田修道院としては、次のような具体的な支援を計画しました。

- 兄弟たちの現地への派遣。元田神父は断続的に現地との関わりを続けていく予定です。豊田修道士もお手伝いに行きます。
- 毎月一日には、被災地のためにミサをささげる。七尾教会では毎月一日に近所の人びとと一緒に祈りをささげています。それに合わせてミサをささげます。
- 車の購入。現在、修道院の車が2台、現地で活躍しています。古い車なので新しいものを差しあげて活用してもらうことにしました。

瀬田教会の皆さんも、お祈りと支援をお願いします。とりわけ車の購入のために、皆さんの献金を呼びかけます。具体的には軽トラック1台と、車椅子で乗り降りができるワゴン車1台です。皆さんのおこころを形にしてお寄せください。よろしくをお願いします。

冒頭の貞明皇太后の御歌への返歌として、ハンセン病の歌人だった明石海人が次のように詠っています。

そのかみの 悲田施薬のおん后
いまに在すかと仰ぐかしこさ

みめぐみを うけまくかしこ日の本の 癩者と生れて われ悔ゆるなし

これの世を 季の世なりと誰か言ふ 癩者が築くこの園を見よ

第一首の大意は「その昔の悲田院、施薬院を作った皇后(であった光明皇后(聖武天皇の后))が今もおられるのですかと仰ぐありがたさ」となります。

第二首は、後に海人の歌集「白描」では「みめぐみは 言はまくかしこ日の本の 癩者に生まれて我悔ゆるなし」と直して発表します。海人を世間に知らしめる代表作でした。

第三首は、国立療養所長島愛生園を讀めるものです。

海人は「白描」の前文で、「癩は天啓である。……癩はまた天啓でもあった」と語っています。大規模災害に力なく屈してしまうわたしたちが、人の関わりの中で神の恵みを感じていけますように。